

お読み下さるみなさんへ

この物語りは児童文学として執筆したものではありません。

現横浜市戸塚区と泉区を跨ぐ踊場地域に伝承される東海道五十三次戸塚宿と猫にまつわる幾つかの短い民話を基に、日本史実としての社会風俗、生活風習のリアリズムをそこに重ね、人間の本質とは何か、家族・親子とは何か、弱者とは何か、人と生きものが共生する幸せとは何か、を今日の社会へ改めて問う現代の仮想短編民話として新しく書きおろしたものです。

今は亡き日本文学の二人の美星、山本周五郎と司馬遼太郎。

山本は、悲しみが充満するこの世の乱れの根源は「無知と貧困」に有ると言い、その耐えがたき苦しみの中を生き抜く江戸民衆が作り出した「氣骨」を描きました。

司馬は、過酷な歴史の中にこそ我々が学ぶべき真実が潜む、そこには「日本人の底力」が存在する。それは鎌倉時代以降初めてこの国に生まれた「坂東思想」が創り出した江戸・東京下町衆の「氣概」に繋がる、と強く語っています。

この二人の文豪が探求した真実とは、物事への無感覚、無関心がもたらす恐怖、それを許さぬ「人間の気質とその覚悟」こそが大切で有る。と唱えた事をみなさんはご存知です。

この短編民話では敢えて日本の古い語句と表現及び方言を残し、この物語を子供たち、次世代たちへ読み聞かせるみなさんがそれぞれの文化力、経験に合わせ自由に内容表現を変化させた、百様な民話に仕立てて、これからの中境時代を幸せに乗り切る小さな手段のひとつとしてご活用下さる事を心から願うものです。

その昔、丹沢山系から広がる足柄、厚木、伊勢原、秦野、相模原等に隣接するわたくしたちのこの地域へその坂東思想が影響を与えた事は確かでしょう。

令和元年九月吉日

現代民話

おたまとねこの玉

作：福徳斎本慶

考証解説：宮田 貞夫

清書編集：福徳斎光慶

資料編集：葛西 健一

写真提供：樋口 涼

資料提供：有馬 純律・榛澤 信義

刊行

和黄猫舞山委員会

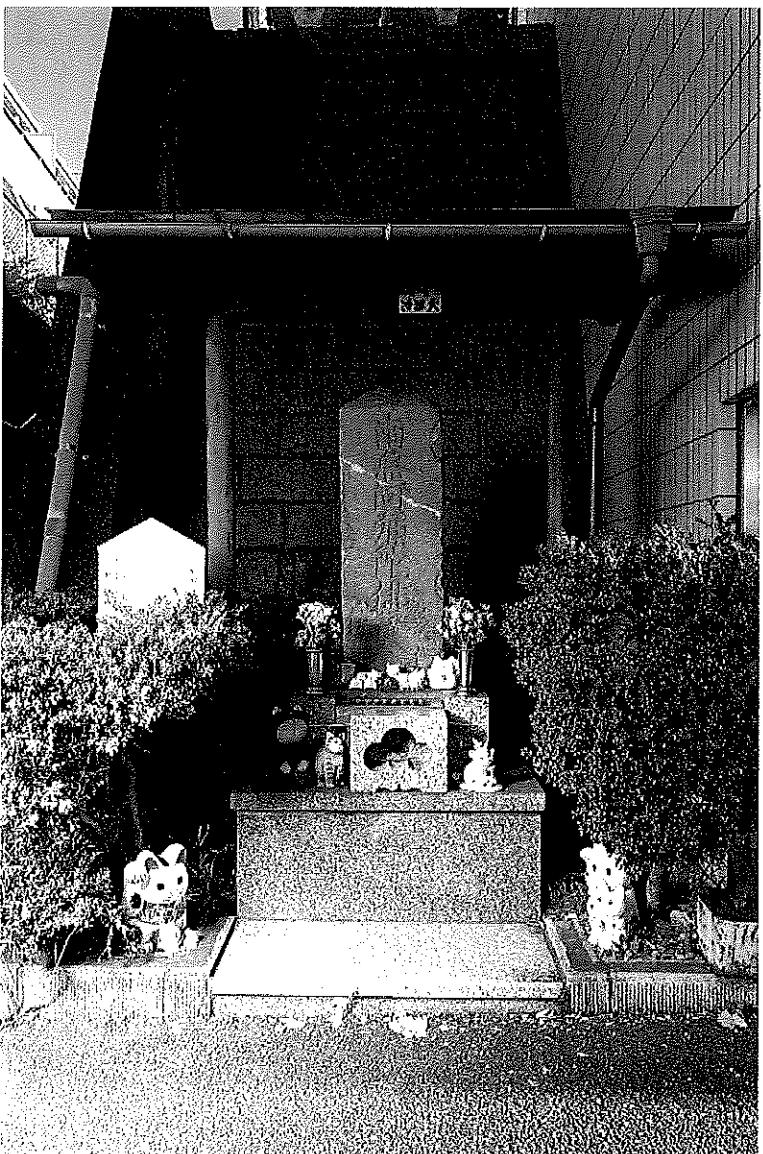
協力

一般社団法人ジャパンインスティテュート

社会福法人神奈川県匡済会横浜市踊場地域ケアプラザ

※この民話は <http://www.odoriba-cp.jp/publication/wp-content/uploads/nekotama.pdf> でダウンロード出来ます

踊場供養塔



撮影：写真家 樋口 涼 氏

令和元年五月二十二日完筆

作：福徳斎本慶

清書編集：福徳斎光慶

おたまとねこの玉

その昔この国は永く永く戦さに明け暮れ、小田原北条家が滅びその落ち武者たち
が駿河を背に連なる坂東の峰々へ散ってから、天下を分ける大戦さで西の大坂が
炎上し、やがて東の江戸にそれはそれは大きな城と町が築かれて随分経った東海
道戸塚宿に起こった、それはほんに短い間の出来事じゃった。

わしはこの相模の國鎌倉郡のと或る代官屋敷近く、宝源寺庵に住む慶派仏師で
な、生きておる時は仏の無著、と呼ばれておった。

今ではもう乱世の戦さを知る者は誰一人生き残ってはおらん。

人々の心は刀から銭へ移り、富める者はより豊かに、貧する者はより貧しく、心
は荒んで他人より先ず己、命の尊さを忘れ、ひたすら欲に迷走する世になってし
もうた。

それは眼に見えぬ新たな戦さのようにわしには思えた。

これは、わしの庵からよう見えた和黄猫舞山の峠の頂上に伝わる 名こそ惜しけ
れ の物語りなんじゃ。

今こそ皆の衆に語らねばならんのじや。

その昔江戸で大火があった頃、坂東の険しい山また山の奥深く、厳夜の冷気に覆
われる曲がりくねった急坂を次々と、おたまは女衛の重三に連れられて振り返る

心を抑え一気に下って行った。

東へ東へと広がり続く未明の大地に立ったその小さな命は、死んだお父つとうお母つかあと暮した炭焼き小屋の方角を探すように澄み渡る空を見上げて師走の風を頬に受けた。

幾多の河を渡り村々を通り越し、一体どのくらい歩いたのであろう。

辺りは再び薄暗くなって、初めておたまは尋ねた。

「おじさん、ここはどこ。」

「腹が減ったか、ここは中田村よ。もうすぐ峠だ、そこを越えりや戸塚の宿場だ。しっかり付いて来な」

肩寄せ合い親子三人で暮した村の夕げの煙がこの峠の頂上なら見えるかも知れない。

その願いを胸に、数えて十のおたまは東の原から暗がり坂を登って行った。

檻なすきに背負う小さな包みひとつ、細い脚は震え、素足に食い込む草鞋わらじにかまわず、暗黒の森を進んだ時だった。

「おい、あれが見えるか。おめえが働く戸塚宿の燈りだぜ。おっといけねえ、白えもんがちらついて来やがった。急ぐぜ。」

転げ落ちる人生のように下る峠道。夕げの煙を忘れて、おたまは男の背を只々必死に追いかけた。

その夜更け、女郎宿の主人金兵衛と女将の松から錢袋を受け取った男は、一言おたまへ「可愛がってもらいなよ。」と残し、宿場を去った。

その日から三年の月日が流れた。

東海道を行き来する老若男女の旅人たち、お江戸復興に運ばれる材木、瓦、米、

味噌、乾魚の荷車と馬喰たち。行商の薬売りやら絵師だの虚無僧だの素性の判らぬ旅芸人にかぶき者ら、参勤交代のお殿様を乗せて行列をつくるお侍とお女中たち。

それを夕に迎え朝に見送る戸塚の宿場、五十にも膨れ上がった宿々の回りに軒を並べた履物、小間物、呉服に染物、土産物から髪結い、金貸しまで、様々な店々。そこから立ちのぼるたくさんの湯気と煙。

おたまは賑わう宿場の活気をよそに、夜明け前から炭火を熾し、水を汲み飯を炊き、野菜をほどき、道を掃く。化粧が染みついた遊女たちの浴衣を洗い、行灯に油をつぎ足し回り呼ばれれば走る日々。寝る間もなくひたすら働いた。

女衒が約束した給金は半分にも届かず、しかし不満顔ひとつ見せず働き続けるある冬の朝、蕎麦宿丁子屋から立ちのぼる大きな湯気に群がるたくさんの猫たちの中で純白に輝く一匹の美しい猫の眼がじっとこちらを見つめていることにおたまは気付いた。黒曜に大きく光り優しく慈愛に満ちたその猫の眼が、この宿場以外行き場の無いおたまの心に何かを与えてくれる。

戸塚宿を流れる柏尾の河下は湿地が広がり、鯉やら鮒やら鰻が仰山漁れて、その匂いが猫たちが群がる丁子屋の湯気と混わり、死んだお母の煮炊きの姿がおたまの瞼に映った。

おたまはその日からいつもその白い猫の気配を感じながら前を向いて手を動かし続けた。

今日も一日が終わろうとした晩のこと、十四になったおたまの足下へ小さな影が近付いた。近寄らず遠ざからずおたまを見守った純白のねこの玉が白い首を少し傾げるとゆっくりゆっくり近付き黙っておたまの顔を見上げた。

「あなたの名はなんて言うの。わたしをいつも見ていてくれて嬉しかったわ。あなたは鳴かない子ね。わたしも泣かない。どうしたの、今日は淋しいのね。わたしは淋しくないわ、だっていつもあなたがいてくれるから。」

ねこの玉が急におたまの脚を裏通りの方へ何度も押す。何度も何度も純白の頭で誘う。

「どうしたの。わたしは何をすればよいの。何処かへ一緒に行って欲しいのね。わかった、あなたと行くわ。」

見張りの男に見つかればただでは済まない、でもおたまは外に出てみたかった。

小走りにねこの玉を追って影から影へ、月明かりの矢沢を登る。

振り返り振り返りおたまをいざなうねこの玉の姿を頼りに走るおたまはやがて、この山坂を登った先にあの峠の頂上がある、と気付いた。

深閑の峠、うっそうと繁る無数の大木、暗い森の闇に走る純白の玉が止まる。それぞれの大木の陰に僅かに光る猫たちの眼、四十、五十、数え切れぬたくさん眼がおたまを優しく見つめていた。

ねこの玉が笑って火打ちの石をたたくと用意されたたきぎの山に火が灯り猫たちが右へ左へ一斉に踊り出した。

おたまは只々驚いて言った。

「あなたたちは誰なの。どうしてここにいるの。わたしを知っているのね。」

子供たちと踊った村祭りを思い出したおたまは嬉しさと懐かしい気持ちで、不思議な幸せを胸一杯に感じ、猫たちの踊りを見続け刻を忘れた。

「今夜はもうだめ、帰らなきゃ。見つかったら大変よ。必ずまた来るから、みんな待っていて。必ずよ。」

そう言い残すとおたまは提灯も無い峠の急坂をねこの玉と駆け下って行った。

猫たちはみんな笑って、峠の森は何事も無かったように夜を閉じた。

この夜から自分を待ってくれる者が出来たおたまの心に生きる力が宿った。

猫たちと踊ることが希望の光となって、それは森の猫たちへ幸せを与える美しい光でもあった。

峠へ抜ける夜の裏通り。^{じょろうやど}女郎宿からよし乃の三味の音が流れると、おたまは働く手を止めて、ねこの玉をそっと撫でた。

遊女たちお客様たちの寝息が漏れ聞こえ始めたことを確かめたおたまが今夜も抜け出そうとした時だった。

何故か今夜はねこの玉が動かない。

「また行くのかい。でもね、今夜はちょいとお前に渡したいもんがあってね、待っていたのさ」

暗がりからふっと現れたよし乃是母のようにそう言うと井戸の端に腰を下ろした。

「よし乃ねえさん大丈夫なの。寝てなくちゃだめよ。薬を煎じて持つて行くから。」

「お前はもうすぐ十六。自分じや判らないだろうけど美しい娘になったね。あたしは伊豆の出でね、十五の時に下女働きと騙されて、この女郎宿へ売られたんだ。家は貧乏でね、弟、妹が七人いて、仕方無かった。あれから二十三年、落ち所まで落ちて帰る所も行き場も有りやしないのさ。何処で探して来るのか知らないけど、お前が煎じてくれる薬草のお陰で生きて来れた。でもね、あたしの命はもう長くはないんだよ。」

井戸の陰から青白いよし乃の眼をじっと見ていたねこの玉が静かに膝に乗って、

細く小刻みに震えるよし乃の手を優しく優しく舐めた。

「この子は玉。あたしが名付けた。子猫の時荷車に首をひかれちまって、声が出せなくなった。それからはあたしのたった一人の娘になってくれてね。あたし以外の者には決して近寄らないこの子がね、お前にだけは心を許した。不思議だねえ。今じゃこの玉とお前があたしの大切な娘さ。」

おたまは黙って心の奥底から頷いた。

「いいかい、よくお聞き。お前はあたしたちみたいになっちゃいけないんだ。何処かに必ずお前らしく生きる場所がある、だからこの地獄から逃げておくれ。時を見て遠くへ逃げるんだ。」

「この手拭いの中にあたしがここで僅かずつ貯めた錢が入ってる。その時持つておいき。錢は大切、でもね、錢に溺れたら幸せにはなれないんだよ。お前に家族が出来たら、何があっても受け入れてやるんだ。心が無きゃ錢は生きないのさ。判ったね。玉、頼んだよ。」

ねこの玉はこくりと首を振るとその赤い手拭いに包まれた錢袋を銜えて床下へ素早く隠れた。

「あたしの本当の名は福。幼い頃は、お福、お福、とみんなに呼ばれて幸せだった。もう一度お福って呼ばれたい、お福に戻りたい。お前はあたしの代わりに一生、おたま、おたま、と呼ばれて幸せに生きておくれ。そろそろ旦那と女将さん

がべべだの かんざし 簪くわ だの買ってやる、とお前に言うはずさ。その時気を付けるんだ。決して忘れるんじゃないよ。・・・・・誰か来たね。」

案の定女将おかみ の松が酒臭い猫なで声で現れて言った。

「よし乃、こんな所にいたのかい。お二階のお客様がお待ちかねだよ。あれ、おたま、油壳ってないで旦那様の所へお行き。ちょっと話があるからね。」

よし乃は何も聞かなかつたように振り返りもせず、一歩一歩ゆっくりと階段を上
がつて行つた。

その夜から五日後、柏尾の河で騒ぎが起つた。

大山参り、江ノ島鎌倉詣で、の旅人たちで一層賑わう戸塚宿を ねぐら 晩とする男衆たち
がわいわいと話す。

「お江戸は火事から復興してたいそつ景気が良さそつだぜ。將軍様も大喜びだべ
な。」

「そつだべさ。吉原じゃ銭に糸目をつけねえお大尽だいじんが大勢おるんだそつでよ。旨
え酒に、別嬪女べっぴんに、銭に、博打ばくちか、俺たちもちつとあやかりてえずら。」

突然誰かが大声で叫んだ。

「どうした、どうしたんだ。身投げか駆落ちか。」

「なんだつて、油屋の下女と若けえ男が舟で逃げただと。女郎じゃねえのかい。

女の名は。一緒に逃げやがつた男はどこのどいつだ。」

「男はよ、あのびっこの野菜売りだつてよ。」「若僧のくせに太つてえ野郎だ。そ
う遠くへ行ってねえから追いかけるんだ。捕まえたたらただじやおかねえ。」

熱り立つ男衆と見張りの男たちが次々に小舟を出そうとする柏尾の堤は、旅人た
ちと野次馬の男と女で溢れごつた返した。

「およしよ、追うんじやないよ。身寄りのないもん同士がくつついちゃいけない
のかい。弱いもんいじめするんじやないよ。あんちゃん男だろ。」

「うるせえ。何をいいやがる、まんじゅう屋の姉さんよ。おとこひでり 男 旱ひ で頭が煮えたん
だべよ。」

「何だつて、もう一度言ってごらん。あんたが男なら見逃してやんな、と言つて

るだけさ。あんちゃんいつまでも若くないんだ、あんたがよれよれ爺じじいになったら、そのふんどし褲ボトムズどこのどなた様に洗ってもらうんだい。女と男はね、真に好いたら何があろうが別れない、って知らないのかい。戸塚の男ならしっかりしな。それともあんた、よそもんかい。」

「うるせえ。戸塚宿の女はどいつもこいつも、怖え、怖え。みんな行くべ。」

湯気と煙が何十ものぼる宿屋も店も宿場は空っぽになった。

よし乃がおたまに言った。

「今だ、逃げるんだよ。急ぐんだ。二度とここへ戻って来るんじゃないよ。探すんだよ、お前が幸せになれる場所を自分の力で探すんだ。早く行くんだ。」

おたまの眼によし乃の瞳の光が焼き付いた。

赤い手拭いの銭袋を銜えたねこの玉が裏通りへ飛び出すのを確かめたよし乃は、
女郎宿の障子をぴしっと閉めた。

傾く西陽がおたまへ笑いかけているようだった。

向かう場所は只一つ、猫たちが待つあの峠へおたまと玉は一里の坂を一気に走り登って行った。

「みんな待っていてくれたのね。ありがとう。わたしは十六になったの。いつまでもあなたたちと心は一緒、だから最後の踊りをみんなで祝って欲しいの。玉もお願いね。みんなわたしの家族ね」

黒曜こくようの大きな瞳、黒漆くろうるしな光沢を発す黒髪から伸びる華奢きやしやなうなじ、足先までしなやかにぬけるような白い肌、それは美しく成長したおたま十六の眩まばゆい姿、木洩れ陽の森に初めて猫たちはその眩まばゆさを見て、天女様だと思った。

「さあ、天まで届くかがり火と煙を焚いて、わたしたちは生きている、とわたし

の村へ知らせるの。さあみんな踊るわよ。」

ねこの玉が両脚立ちで踊り始めると、森の虫たちが一斉に鳴きだし、草花が大きく揺れてそれに續けと猫たちが回り出した。

両腕を広げ舞い始めたおたまがみんなの輪の中に溶け込んで、心と心がひとつになると、その身体の回りに小さな小さな光彩の粒が飛び始めた。

やがて光彩の粒はどんどん増えて陽が落ちた森の大木と大木の間を埋めて行く。

光彩と踊りが交わり、空を見上げると下の和泉、上の飯田、汲沢の小川、大池、岡の津、柏尾の沼と四方八方から何本もこの峠の森に向かって夜の虹をかける螢の河、と判った。

それはこの地の螢が作る希望と言う天の河の舞台であった。

猫たちはおたまを真なる天女様だ、と夢中で一緒に踊り続け、そして光の中で眠りについた。

が、ねこの玉と片目の斑尾だけは、螢の光彩が少しずつ薄れゆく中で踊り続けるおたまを優しく見守っていた。

「玉、本当にお世話になりました。あなたはここでみんなといつまでも幸せにして欲しい。わたしは決してあなたを忘れない。」

ねこの玉は純白な身体をおたまに寄せて赤い手拭いの包みを渡すと、おたまの手をそっと舐めた。

「ありがとう。玉は声が出せないけど、あなたの子供たちは声を上げて玉を、お母さん、お母さんって呼ぶわ。大丈夫、きっと幸せになるわ。わたしは誰も恨まない、裏切らない、そして必ず幸せになるから、わたしを忘れないで。」

そしておたまは消えた。

ねこの玉はその背に向けて、一粒の透明な真珠を眼からこぼし、子猫だった頃を

思い出したかのように短くきーと泣いた。

おたまの姿が消えた十日後の朝早く、よし乃が死んだ。

未練を残さず笑うようにそれはそれは晴れやかな死顔じやつた。

見張りの男たちがいつもの如く山に穴を掘り、捨てるように埋めたその様を見届けたねこの玉も又、戸塚宿から消えたんじや。

あれから長い刻が過ぎて宿場の者たちの記憶から全てが忘れ去られたある夏を迎える日のこと、山百合の白い花が一斉に咲き始めた丘へ鍬を肩に村の衆が登ろうとすると、見知らぬおなごに声を掛けられたそうじや。

りん 凛とした見事な旅支度、いき 粋で品が漂うふくよかな笑みを浮かべ言ったそうな。

「この辺りはほんに穏やかで、猫たちも幸せそうであること。」

「そうだべさ。たまには悪さもすんけど、ほんに可愛いいやつらですよ。おもしれえもんで村に気が立つもんがおると、猫たちの中から必ず尾だけ斑まだらの白猫が現れてそのもんの手をそっと優しゅう舐めるんで、あらそ諍う気持ちが落ちてよ。お陰で今じゃ村の衆みんな心ひとつで働いて豊かになったずら。ほんにありがてえ。むつかし峠の森に住む純白な猫がよ、それは可愛い子猫を四匹産んで仲良く踊った、って話しだ。でよ、その孫、曾孫がこの辺りの村々に広がって、女房たちも子宝に恵まれて、どこも朝から煮炊きの煙が昇り幸せだべさ。これこそ、福德幸寿、そのものだべな。ところで御新造さん、これから何処へ行きなさる。」

おなごは、はるか遠く西に霞み見える峰々をそのしなやかな指で示したそうじや。

「酒匂の上奥を渡り、縁深き村を訪ね、江戸で待つ家族の元へ戻るつもりで居り

ます。お引止めし、ご無礼致しました。どうぞ猫たちといつまでもお幸せに。わたくしもほんに嬉しゅうございます。」

その晩わしが近くの寺から庵いおりに帰ると、一通の文と小さな桐箱が置かれておつて、箱を開けるとまばゆい黄金の小判が十枚、赤い手拭いに包まれて入っておった。

驚いて文を読むと流れる柳のように美事な文字でこうあった。

「わたくしは、名乗るほどの者ではございません。無著様むしゃくへお願ねいがございます。このお金で今は亡きお福ねえさん、息女の玉と猫たち、そして名も残さず世を去った女たち、犬と鹿きげすまされた者たちの小さな塚を峠の頂上にお建て頂けましたら、有難く存じます。」とな

九十を超えたこの命に最後の務めが訪れた。わしは老いた身体に鞭打って重い石塔を背負い必死の思いで峠に登り、遙か西に霞む坂東ばんとうの峰々が見渡せる頂上に小さな小さな供養塚を造り、その下に文と小判、そして赤い手拭いを埋めたんじや。

木々の陰から猫たちの眼がじっと見つめている、と感じたわしは、戸塚宿で起つたこの不思議な出来事を決して忘れぬ為に、残る気力を振り絞り覚悟を以って石塔へ 名こそ惜しけれ と刻んだんじやよ。

わしもこの世から消えて三百と余年の月日が流れ戸塚宿も消え去り、だがな、あの石塔だけは守ってくれる者たちがおった。やがて人々はここを 猫の踊場 と呼ぶようになったそうな。

《おたまの仮想年譜》

(数え) 年齢	西暦	おもな出来事	徳川 将 軍 系譜
1才	1689年	北条家三代の重臣で、上野沼田城主猪俣邦憲が豊臣秀吉により討首となり猪俣一族は関東各地へ落ちた。その末裔である、父 猪俣 力、母 猪俣 華 の一人娘として7月29日生まれる。本名 珠(たま)。	綱吉
2才	1690年	井原西鶴が「好色一代男」を1682年刊行し、この頃浮世草子が流行する。	
3才	1691年	東北地方を中心に元禄の大飢饉が発生。	
6才	1694年	浪人堀部安兵衛(武庸)が赤穂藩に招かれるきっかけとなった高田馬場の決闘が起こる。	
9才	1697年	父力と母華が他界し、珠(たま)は天涯孤独の身となる。	
10才	1698年	<p>10月9日勅額火事</p> <p>京橋南鍋町(山下町1丁目)の木戸から北8軒目にある仕立物屋九衛門宅より出火。折からの南風にあおられ、日蔭町、数寄屋橋門内に延焼、多くの大名屋敷、旗本屋敷などを焼き尽くした上、神田橋の外に延焼した。さらに駿河台から下谷、神田明神下、湯島天神下へと火は流れ、下谷池之端の出合茶屋を縊なめしつつ吉原を全焼させて浅草へと拡大。寛永寺境内にも延焼し、本殿や新築早々の仁王門、巖有院(徳川家綱)廟を焼き、三ノ輪から千住に及んだ。一方、日本橋方面に広がった火は両国橋を焼き落として本所まで及んだ。半日以上燃え盛った後、22時頃大雨によってようやく鎮火した。この大火で死者は3000人以上にのぼる。大名屋敷や寺院も消失した。なお、旗本の吉良義央(きらよしひさ)はこの火事で自邸を失った後本所に転居。そこで赤穂浪士討ち入りに遭遇している。</p> <p>12月 お珠(たま)が女街の重三に戸塚宿の女郎宿へ連れて来られる。</p>	
11才	1699年	1月 女郎宿で下女として働き始める	
13才	1701年	4月21日江戸城本丸松の大廊下で浅野長矩(あさのながのり)が吉良義央に斬りつけた刀傷事件。	
15才	1703年	<p>1月30日 赤穂浪士四十七士、吉良邸討ち入り</p> <p>12月31日 江戸で大地震(元禄地震)</p>	
16才	1704年	<p>8月 戸塚宿から消える。猫の玉も消える。</p> <p>9月 猪俣一族の末裔である江戸小伝馬町の差し物師、辰五郎の所に身を寄せる。</p>	家宣
17才	1705年	辰五郎の紹介で、向島・深川の材木商「伊勢長」絶棟梁、専太郎に預けられ、読み書き、算術、そろばんなどの手習いを受ける。	
19才	1707年	12月16日 富士山 宝永大噴火	家継
20才	1708年	伊勢長の養女に迎えられ、跡取りの丁吉郎の嫁となる。 その後、二人の男児に恵まれ母となる。	吉宗
32才	1720年	7月 中田に現れ、無著へ供養塔建立を願い、その後、亡き父母を弔う為に坂東の生まれ故郷へ向かう。	
?	?	没年没地不明	

解説「おたまとねこの玉」について 2019年8月27日

これはれっきとした短編民話小説である。いつのころか分からぬ戸塚区（泉区・1986年分区）には「ねこの踊場」で知られる民話がある。醤油屋の水本屋のトラという猫が姉さん被りの大勢の猫と山中で踊る話はユーモアがあり、いかにも平和的である。今回、作者本慶が取り上げた「おたまとねこの玉」の話は元禄11年代（1698年）、戸塚宿旅籠に身売りされた10歳の少女おたまの一代記を綴った架空の話である。かつて日本には「おしん」や「楳山節考」の時代が存在した。

翻って現在の日本の姿は、一見裕福そうに見えて子どもへの虐待や殺人、いじめ、自殺は依然あとを絶たない。こうした危機的状況にも拘らず誰も深く考えようともしない。改めて「貧しさ」とは何か、今、史実を想起し、実感することの意味は大きい。これが今日的視野からおたまに託した作者の意図ではないか。以前の「ねこ伝説」とは違った未来を踏み込んだコクのあるドラマ。そんな気がする。

元禄12年（1699年）1月。おたま数え年11歳。相州・松田から戸塚宿旅籠屋に下女として売られ禿（かむろ）として働き始める。やがては飯盛り女や遊女になる話だ。旅籠とは当時、どういうものだったのか。その人身売買の実話が残されている。寛政10年（1798年）10月10日。戸塚宿丁子屋に伝わる年季請状に事細かく記されている。「此のふさと申す女子。我等実娘に御座候所、此の度び諸親類相談の上、人主請人に会い立て、貴殿方へ道中旅籠屋飯盛女子奉公に差し出し申し候処実正也」。このあと、さらに年季2年とし給金八両二分の金子（きんす）確かに受け取ったこと、若し、ふさが駆け落ちや、亡くなつた場合どうするかなど長々と書かれている。

子女たちの多くは後背地の農村だが、丁子屋に来たふさは相州子易南諷訪坂。「相州風土記」によると「坂に諷訪坂・道子坂の名あり、共に大山道の係るところなり」とあり、大山道を介して戸塚と子易とは往来があった。一方、おたまは坂東は下足柄松田だが、周辺村落は虫沢村、松田惣領、町屋の当たりか。江戸初期の松田惣領は畠が村の大半を占め、田は2町8反歩ほどで中田で、地味が悪く生産力が低い下田が多かった。江戸時代の産業構造は農業が基本で、武士階級はその貢租生産者たる農民に対する統制は厳しく「土農工商」とは名ばかり。「農は納なり」といった考えが支配していた。農民の多くは貧しく仕事の合間に薪を採り炭焼きなどを副業で生計を立てていた（農間稼ぎ）。

万治3年（1660年）の地検帳によると名前が記入されているもの59名、そのうち16人が無屋敷農民だった。農村の次男、三男や下人、あるいは北條家の猪俣邦憲が豊臣秀吉に敗れた猪俣一族は坂東、関東各地に散らばっていった。両親と死に別れたおたまは、そうした農民ではなく落ち武者たちの末裔の一人だったろう。

おたまと女銘が通ったルートは秦野、伊勢原、粕谷、用田を経て藪鼻（長後の旧名）へ。飯田で大山道に分かれ村里の中村を経て中田村、戸塚宿に出る大山道（戸塚道）と考えられる。走行距離およそ43キロ。早朝4時ごろ出れば戸塚宿は灯が点るところには着く。

戸塚宿が東海道五十三次の宿駅に指定されたのは慶長9年（1604年）。53宿の全部が指定されたのは寛永元年（1624年）になってからだった。関ヶ原の戦い（慶長5年・1600年）で家康が勝利したことで東海道は「日本の大動脈」として飛躍的に発展。その後、始まる参勤交代などにより交通量が増え街道筋の整備が進んできた。世情が安定すると、お伊勢参りなど庶民の利用も拡大、なかでも江戸から戸塚までの距離が10里半（約42キロ）で、1日の行程では距離的に便利な戸塚宿の利用が多くなった。荷物の運搬や旅人、武士など、いろいろな職人衆で繁盛していた。戸塚宿は戸塚、吉田、矢部の3か町から成り、町並みには問屋場が3か所、本陣、脇本陣があり旅籠が75軒あった。その他、飲食店、雑貨荒物屋、乾物青果屋、肴屋、薪屋、農具鍛冶屋、桶屋、紺屋など。天保14年には戸数613軒、人口2906人になっていた。旅籠屋の数も小田原の95軒に次いで戸塚の75軒は2番目で箱根より多かった。寛政5年（1793年）以後から1軒の旅籠に飯盛り女は2人まで。宿全体では50人と決められていた。

さて、この作品にはいくつかの特徴がある。多分に作者（福徳斎本慶）の生い立ち、経歴（画家）、並はずれた才知に負うところが多い。仏師運慶に傾倒した作者が「ほとけの仏師」に仕立て物語の最初、最後に語り部に無著を登場させていることだ。文章の中で敢えて難しい漢字を遣っているのも、それは日本古来の美しい漢字の創生である。巧緻を極めた光粒を鏤めたような色彩感覚。今では差別用語や死語になった女郎、女衒、旅籠、飯盛り女などが頻繁に出てくる。さらに人物や動物（ここでは猫）に障害者が登場する。声が出ない猫や片目の猫、びっこ野菜売りの男など。世間でいう弱者だ。ここで一部、方言が遺されている。～ですよ、～だべさ、など昔、伊豆・足柄・三浦一帯で遺わせてた言葉で中田あたりでも、50年くらい前には年配のおばあさんたちが使っていた。今回、調べて初めて分かったことで言語的にも興味深い話である。

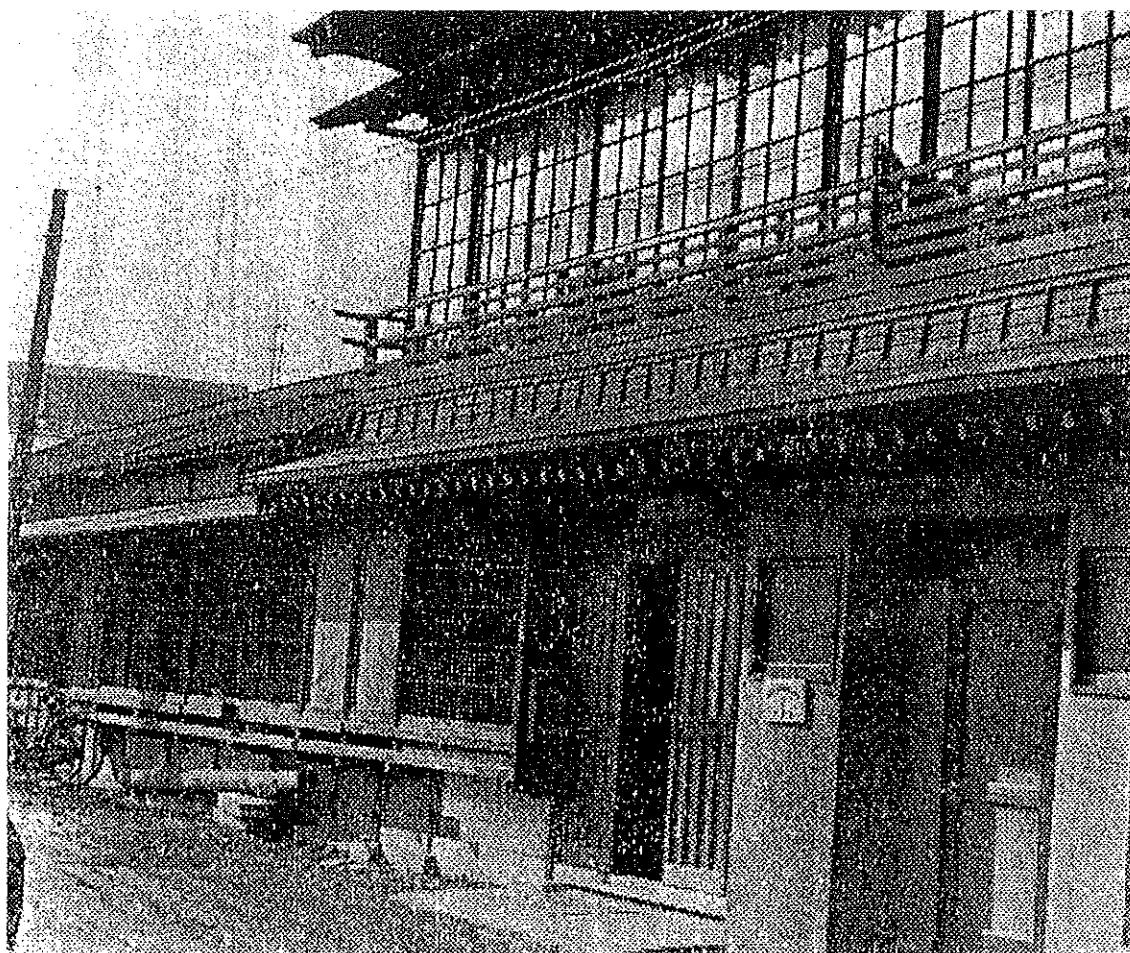
私たちの社会は障害者も健常者もいて人間社会が成り立っている。この中には現代でいう「福祉」という壮大なテーマを含んでいる。障害者は決して弱者ではないという作者の強い思いが、そこにある。この民話には、どんな苦境に遇到了場合でも乗り切る「覚悟と勇気」の大切さを教えている。おたまは22年後、32歳の凜呼たる女性（御新造）になって甦った。戸塚を忽然と消えた日、江戸深川で材木商、棟梁の専太郎に預けられ幸せに暮らした。ねこの玉も片目の斑尾と結婚、4匹の子供を産み、それぞれ福徳幸寿と名付けた。その子孫が何代も続き、中田の住民に幸せを運ぶ存在になっていた。おたまが

16歳で、この土地から消えた日、そこには命を懸けた「決断」があったはずだ。野菜売りの男が遊女と駆け落ちした時も同じだ。「今の日本に欠けているのはこの決断。決断とは命を懸けること」。作者の熱い心情が伝わってくる。令和の新「おたまとねこの踊場」として末長く読み継がれてほしい民話小説である。

（考証解説・宮田貞夫）

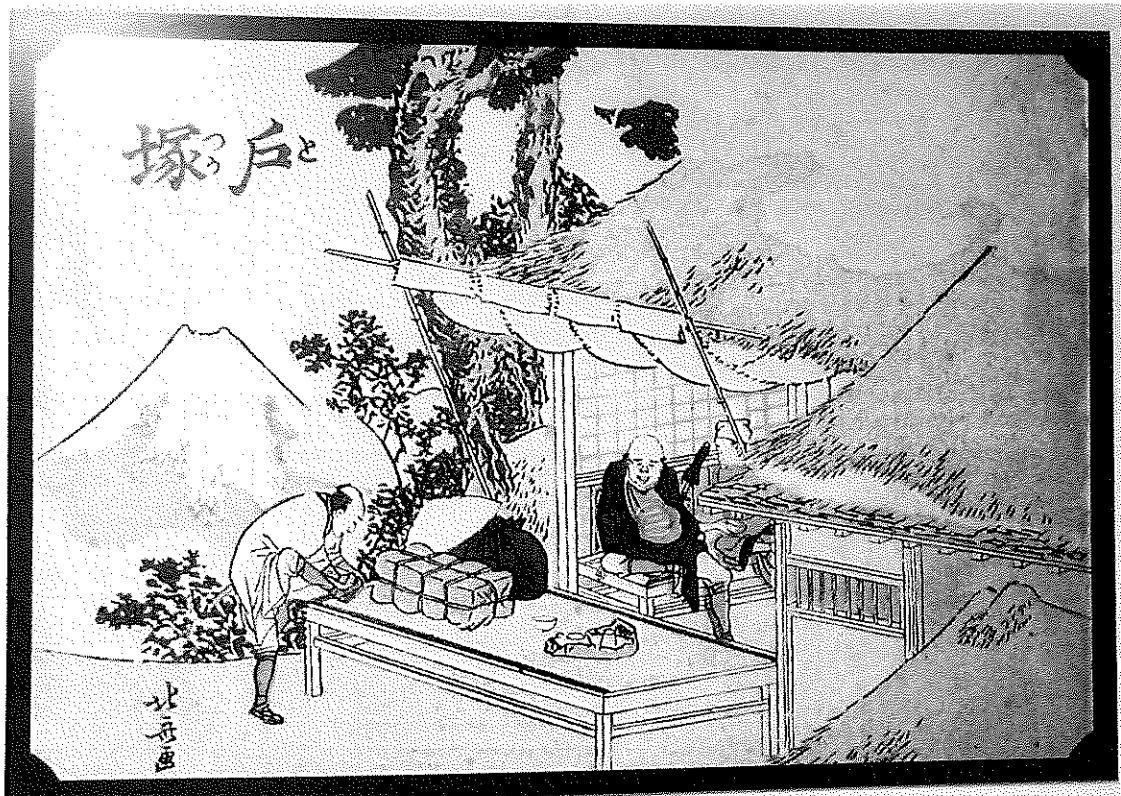
＜資料協力＞ 本稿の作成に当たり時代考証、資料など有馬純律、榛澤信義両氏のご教示、ご協力に心から感謝申し上げます。

東海道五十三次戸塚宿の遊廓史跡写真

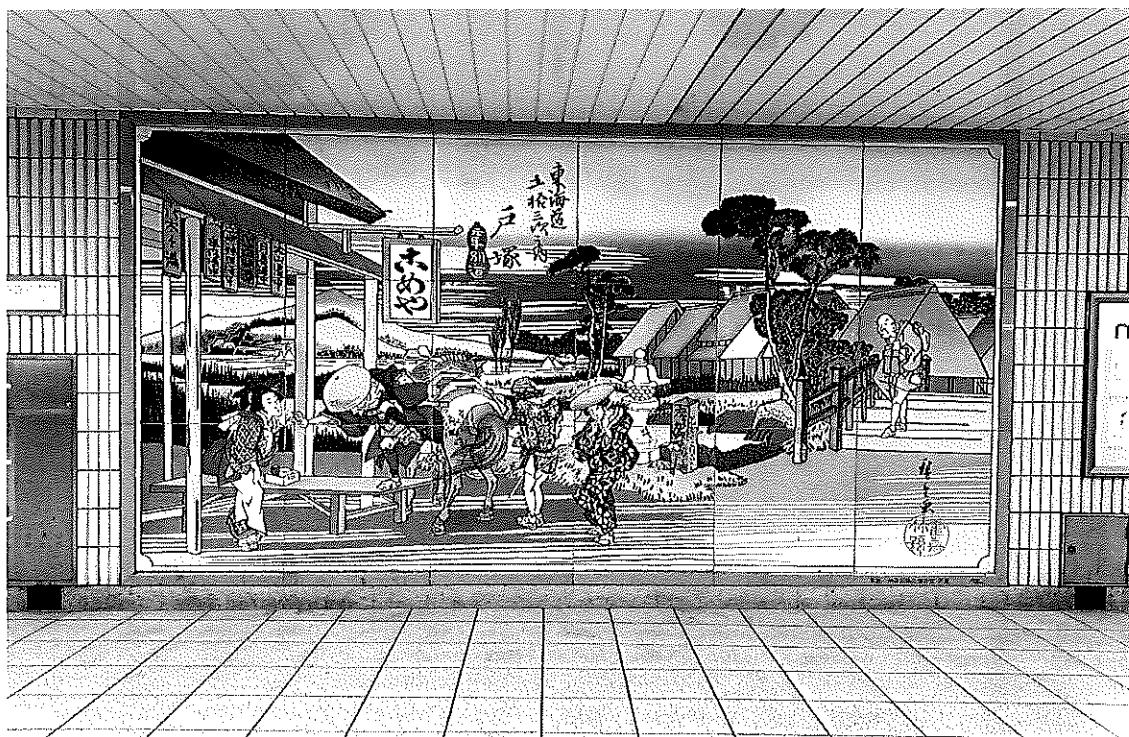


「戸塚区郷土誌」から

江戸時代の戸塚宿



JR 戸塚駅地下 1 階通路壁面の銘板 葛飾北斎画

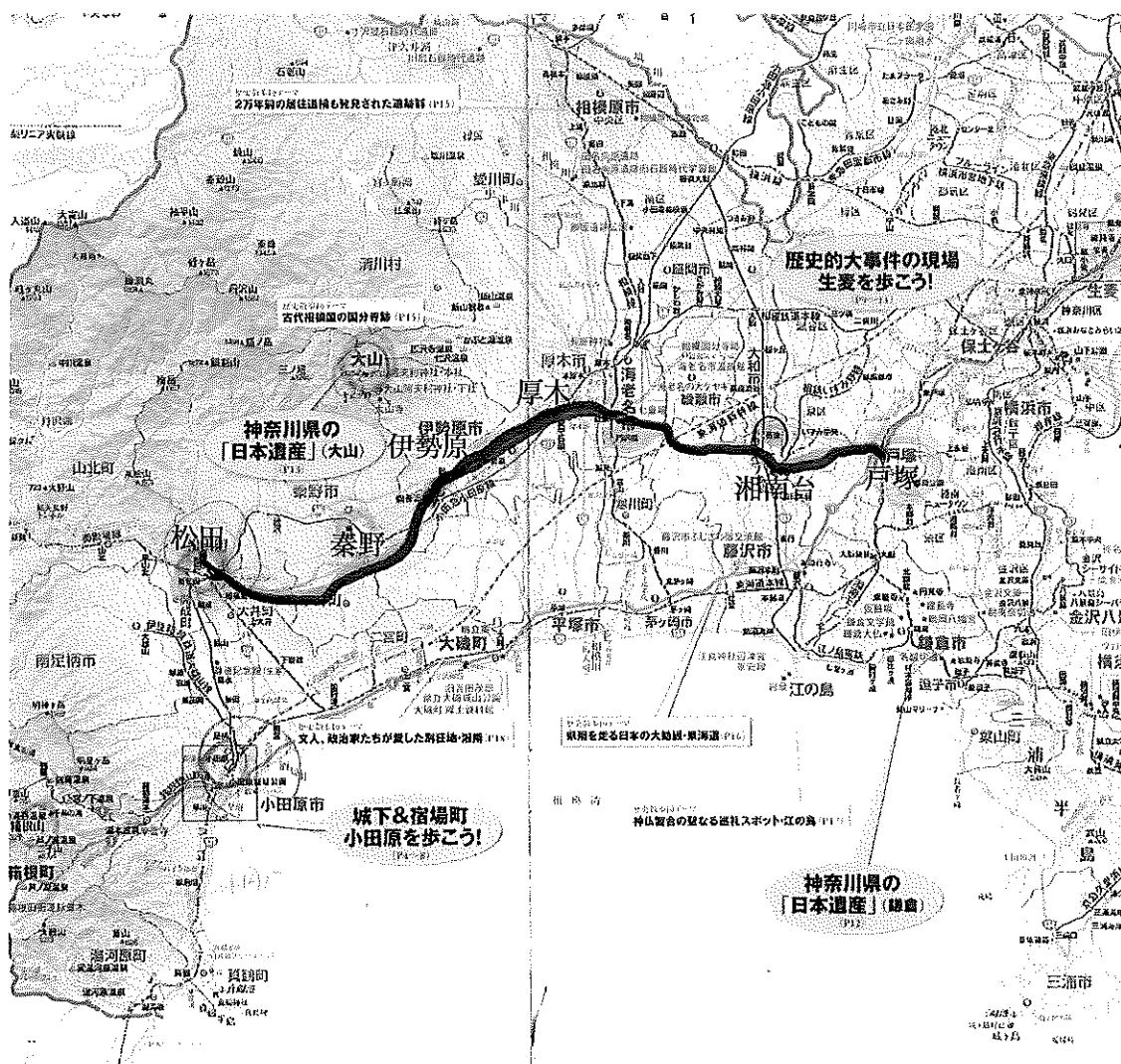


JR 戸塚駅地下 1 階壁面の銘板 (戸塚宿<大橋附近>安藤広重画)



運慶作 国宝 無著菩薩立像 鎌倉時代・建歴2年(1212)頃 奈良・興福寺
東京国立博物館運慶展 ポストカード

おたまが歩いた仮想地図



地図：神奈川県国際文化観光局 観光部観光企画課「神奈川ぶらり歴史散歩」